

## 朗読劇あらすじ

### 『異世界ですが、説明書は付属してません』

目を覚ますと、そこは見渡す限りの草原。

駅の階段にいたはずのミオと、ベッドで寝落ちしたはずのカイは、理由も分からぬまま“異世界”に放り出されてしまう。

地図も説明書もなく、なぜか首から下がる社員証だけが現実との唯一のつながり。

戸惑う二人の前に現れたのは、この世界の村人・ルナ。

明るく天然な彼女に導かれ、二人は「ルーメ村」で一夜を過ごすことになる。

焚き火を囲みながら語られるのは、

「帰りたい」という現実と、

「ここにいてもいいかもしれない」という迷い。

やがて三人は、“欲しいものを映す”という不思議な「門」の存在を知る。

帰る道を映すのか、残る理由を映すのか——

門が試すのは、場所ではなく、生き方そのものだった。

軽口で恐怖をやり過ごす者。

現実から目を逸らさない者。

知らない世界へ踏み出そうとする者。

説明書のない世界で、三人はそれぞれの選択をする。

答えは用意されていない。

それでも、人は進んでいく。

## 配役（3名）

### ミオ（女）

#### 現実派／ツッコミ役／物語の軸

- 冷静で責任感が強く、状況整理が早い
- 軽口に逃げず、現実と正面から向き合おうとする
- 「帰る」という選択を最初から最後まで貫くが、強さと弱さを同時に抱えている
- 観客の視点に最も近い存在

#### ► 演技ポイント

理性的な口調から、徐々に感情が滲み出る変化が重要。

大きく泣かず、息・間・語尾で揺れを表現する役。

---

### カイ（男）

#### 軽口派／ボケ役／空気の潤滑油

- ゲーム脳で異世界を処理しようとする
- 冗談と軽口で恐怖をごまかすタイプ
- 一見軽いが、内側では強い迷いと不安を抱えている
- 終盤で「ちゃんとする」決断をする裏主人公

#### ► 演技ポイント

前半はテンポとノリ重視。

後半は一気にトーンを落とし、落差で観客の心を掴む。

---

## ルナ（女）

### 異世界の村人／天然×芯／物語の鍵

- 明るく素直で、少し不思議な価値観を持つ
- 「影」「火」「門」など、この世界のルールを語る案内人
- 天然発言で笑いを生む一方、核心を突く言葉を静かに放つ
- 三人の中で、最も“前に進む”存在

#### ▶ 演技ポイント

可愛さよりもまっすぐさ。  
強い言葉ほど淡々と、間を大切に。

## ボイスサンプル

### カイ役（約1分目標）

うわ、草。  
……いや比喩じゃなくて、ほんとに草。  
見渡す限り、草。  
コンビニ？ない。電線？ない。  
つまり詰み。  
——いや、待て待て。  
こういう時は落ち着くんだよ。  
ゲームでも最初のマップは、だいたい草原だから。

（少し間）

……でもさ。  
冗談言ってないと、怖いんだよ。  
怖いって認めたら、足止まるじゃん。  
だから軽口。  
逃げじゃない、応急処置。

（声を落として）

帰れるなら、帰りたい。  
ちゃんとしたいし。  
……閉まってる扉、  
今度はノックくらいしてみたいんだよ。